チェルノブイリ通信

発 行 チェルノブイリ支援運動・九州 事務局
連絡先 北九州市八幡東区春の町1-3-7 日開荘2号
Tel・Fax 093(681)1780

口座番号 01770-1-65328
加入者名 チェルノブイリ支援運動・九州

1996年9月30日
No. 34

'96夏 スタディツアー
アコーデオンに合わせながら森で楽しげに歌う村人たち
(西日本新聞連載「ベラルーシの旅」9月20日より)

チェルノブイリ通信３４号をお届けします！

朝晩のひんやりした風の流れにすっかり秋の気配を感じるようになりました。暑かった夏の間、日が沈んでしまうまで西日が照り続ける事務所は、それはもうまるで蒸しぶろの中にでも居るような錯覚さえ覚えてしまう程で、『来年はもう少し涼しいところに引っ越したいね』というのが毎年の口癖になっているのですが、ようやく快適に過ごせる季節がやってきました。これからは作業効率もグット上がることでしょう。

さて１年をかけて準備を進めてきた「チェルノブイリ・スタディツアー」ですが、８月２７日、総勢２０名の一行は、無事に１０日間の旅から帰ってきました。９月１５日には九州・山口から参加した１２名が八幡東中央公民館に集まり反省会を持ちました。同じ場所で４月から毎月学習会を行なってきていましたが、９月１５日の集まりはそれまでのものとは少し雰囲気が違っていました。１０日間の旅が、彼ら、彼女らをぐっと逞しくしたようでした。旅の思い出を１００頁前後の文集にまとめ、ブックレットサイズの本として出版する計画も進んでいます。編集などは若者たちに任せています。ご期待下さい。

最後にヤコベンコさんの手配りのおかげでベラルーシ国内での滞在費が予定していた金額よりも大幅に安くなり、予算をオーバーしなくてすみました。感謝しています。

‥‥というわけで今回もじっくり目をお通しください。

【今回の内容】

- スタディツアー報告
- チェルノブイリ支援・広島医療協議会の活動報告について
- ブイソフ親子来日日程、及び若者たちのチェルノブイリ報告会、写真展、原画展、バザー等の案内
- 第７回チェルノブイリ支援運動・九州総会案内
- 事務局より

‥‥となっています。

すばらしい旅になりました！！
チェルノブイリ・スタディツアー報告

「チェルノブイリ風下汚染地のいのちとくらしと魂との出会いを求める'96夏スタディツアー」のメンバー２０名が全員元気に帰ってきましたので旅の報告をします。

チェルノブイリ・スタディツアー 行動記録

◇スケジュール◇

8/18 ・成田発、モスクワ着

19 ・貸し切りバスにてベラルーシ共和国へ
・メルクールビッチの小学校・幼稚園を見学
・文化会館にて民俗芸能（ポルカ）を鑑賞

20 ・セブロビッチ村（汚染地離村）見学
・建設中の核廃棄物処理工場
・パン工場、民芸品工場の見学
・チェチェルスク病院に尿検査用紙贈呈
・博物館の見学
・民族アンサンブル「ラドニッツァ」鑑賞
・オプショナルツアーとしてチェルノブイリ原発見学

21 ・モズィリ市長と面会
・博物館、ビール工場、文化ホール、社会エコロジー同盟の支部を訪問
・グリシコビッチ村にて歓迎会
・ホームステイ

22 ・小学校・教会見学
・森でピクニック
・グリシコビッチ村の診療所に医薬品を贈呈
・お別れ夕食会

23 ・ミンスク市内見学
・事務局スタッフはチェルノブイリ担当大臣、外務次官、税務省局長らと会談
・ブイソフ親子と会談

24 ・サナトリウム・九州見学
・国立第一外科病院で働く菅谷昭医師と対談
・希望２１（ドイツが支援している学校サナトリウム）見学
・ハティン、第二次世界大戦メモリアルパーク見学

25 ・モスクワへ移動

26 ・セルギエフポサード、民芸品工場、寺院見学

27 ・成田着

◇持っていった支援物資◇

・尿検査用紙　２００枚　９万円分
　チェチェルスク病院へ贈呈
　＊ドイツから良い検査機器が入ったのですが検査用紙が底をついてしまい、至急欲しいということでした。

・抗生物質注射用　１０万円分
　ビタミン剤　　１３万円
　鉄剤　　７万円
　サナトリウム・九州、グリシコビッチ診療所へ半量づつ贈呈
　＊今回は大人数で物資が多く運べるため、ビタミン剤と鉄剤は、かさばるけれど子どもが喜ぶキャンディータイプのものにしてみました。

ツアー参加者からの報告

福岡県遠賀郡水巻町
矢野　宏和（２６歳）
＜有機コーヒー社員、チェルノブイリ支援運動・九州事務局スタッフ＞

ＳＴＯＰと書かれた三角の赤い標識と遮断機を過ぎた後も、収穫の終わったライ麦畑は、はるか地平まで続いていた。半円錐状に凝縮された麦わらは、青空と黄色い大地が触れ合う彼方まで点在している。直径２メートル程のその固まりは放射能汚染地帯にあっては、「墓碑」以外の何者にも見えない。こ
こら辺りで収穫されたライ麦は、汚染されてないものと混ぜて出荷されるという。

しばらくすると、チェルノブイリ原発事故後、移住を余儀なくされた村に着く。以前は１５００人が住んでいたというセブロビッチ村。今は廃虚である。が、廃虚と呼ぶには、まわりの自然が豊かすぎる。時季は夏。街路樹の緑は冴え、庭園のコスモスは風に揺れ、林檎もたくさん実っている。家庭菜園には雑草が生い茂っているものの、少しの手入れで何とかなりそうだ。放射能に汚染されている限り、何とかならないのだけれども。

「ああ、こんな家に住めたらいいだろうな」何も知らずここに来ていたなら、わたしはそのように呟いていたに違いない。そこには、柔らかい樹の家と、自給的な食生活を築く菜園があった。私が憧れる生活空間だ。

家の中を覗いてみて、初めてそこが廃虚であると実感する。床板は砕かれ、空っぽの地下室が見える。硝子は割られ、タンスはひっくり返されている。盗賊の仕業だ。樹木の緑に囲まれて、人間の愚かしさだけが浮き彫りにされる。

看板が傾いた診療所。ひっそりとした小学校。眩しい日差しが降り注ぐ校庭。てけてけと走る子どもの姿が残像となって思い浮かぶ。

人の手が加わらないだけ、ここの自然は今後より豊かになっていくことだろう。放射能を取り込みながら育ちゆ

く植物。そして降り積もる落ち葉に、この村は埋もれていくのだろう。

美しい自然と、見えない放射能。土に根ざした生活空間と荒らされた家。朽ち果てていく村と生い茂る緑。これらの組み合わせを、どう整理したら良いのか。何もわからないまま、私は村を後にした。

次に訪れるグリシコビッチ村には、放射能の汚染と向き合いながら生きる人々がいる。そこに行けば、放射能汚染と人との関わりについて、何か分かるのではないか。そんな想いを抱いて、私はグリシコビッチ村にむかった。

グリシコビッチ村は人口２３００人の村で、放射能管理地域（汚染度は１から５キュリー）のなかに位置している。この村に住むグリーシャさん（３９）の家に２日間滞在させて頂いた。

村に着いたのは午後７時。奥さんのガリーナさん（３３）と、次男のミーシャ君が迎えに来てくれていた。日本人と会うことなど初めてのことだろう。きっと緊張されていたことと思うが、ガリーナさんは温かい笑顔で通訳の山口さんと、私を出迎えてくれた。

簡単な挨拶のあと、家に招かれた。菜園と家畜、果樹。自給的な生活をしていることがすぐ分かる。菜園には、トマト、キャベツ、インゲン、とうもろこし、ピーマン。２匹の山羊と４匹の豚。畑をうろつく鶏。夕食には、家の周りで育まれた食べ物が食卓に集う。

ウォッカの酔いと、料理の湯気でかすむ食卓に、どうしても廃虚の村で見た光景がオーバーラップしてきて仕方なかったが、その日の夕食はとても華やかで楽しく私はその雰囲気にしばらく身を委ねていた。『最初、日本人が自分の家に泊まりに来ることになったとき、もう慌ててしまって大変だったわ。何をしゃべったらいいのか。どんなもの食べさせたらいいのか。隣のおばあちゃんに聞きに行ったけど分からなくて。もうとにかく、精一杯できるだけのことをしてみようと思ったの。』明るいガリーナさんが会話をリードしてくれる。傍らでは、物静かなグリーシャさんと二人の子どもたちがお母さんの話を聞いている。

定期的にグリーシャさんは、『さあ、乾杯しよう』とウォッカをグラスに注ぐ。それは一気飲みしないといけない。３回目の乾杯を終えたとき、通訳の山口さんはすでに意識が朦朧としている様子だったが、それでも通訳は続行してくれた。

私もこのままウォッカの酔いにまかせて、たのしいままこの安らかな時間を終えてもいいなと思っていた。

が、次男のミーシャの額の手術痕を見たとき、急速に酔いが覚めていった。

『二人の息子さんたちは、どんな様子ですか』と聞いてみた。

目を輝かせて話すガリーナさんの目線が一瞬うつむく。『二人ともとてもいい子よ。長男のコーリャ（12）は、成績もいいし家畜の世話もきちんとしてくれる。ミーシャ（10）は。少し身体が弱いの。心臓の調子が悪くて。で

もそれは仕方がないことだと……。』

放射能の影響は？という質問をしても仕方のないことは分かっていた。村の診療所には、放射能と子どもの病気の関連について調べることができる医療も医者もいないのだから。誰も放射能の実体を把握できないというのが実状だ。

この食卓に放射能という言葉を置いてはいけなかった。自然の恵から築かれる食生活に対して、それが危険だからといって、充分な説明ができないままに、『心配ではないですか。』と一体誰が言えるのか。ご馳走してもらっておきながら、たかが２泊しかしない人間が、口を挟めることではない。申し訳ないという想いが募り、折り紙で鶴を作ったりして、話題を変えようと努めた。

ガリーナさんが隣の親戚の家に行こうと言ってくれた。

ウォッカの酔い、一人では歩けない山口さんを、グリーシャとガリーナさんが両脇から支えてゆっくり歩く。ガリーナさんが優しいメロディーを奏でてくれる。風が心地好い。寄り添う三人の後ろを歩きながら、私は。

さっき幾分強引に打ち消したいくつかの疑問が口を突いてくる。

放射能が危険かどうか、身体が壊れてしまった後に気づいても遅いのではないですか？

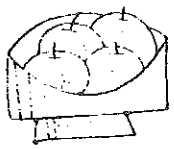
『小さい子どもが最近たくさん死んでいる』って、さっきグリーシャさんが言ってたけど、それも放射能のせいですか？

この辺の放射能汚染度は、日本では立ち入り規制がしかれる所なんです。ここに住んでいて恐くないですか？

ここから離れたもっと安全な所に移り住む気はありませんか？

森の木々と囲まれたここの生活には憧れるけれども、やっぱりそれでも私は放射能が恐いです。

グルシコビッチ村の街灯には、電気が通っていなかった。垂れ込めた雲に覆われて星もない。闇があるだけだった。



下関市

西野自由理（高校２年）

ロシア・ベラルーシから１０日間のスタデイツアーを終えてからしばらく、時差ぼけではない、向こうに対する興奮のほとぼりが続いていました。毎日がツアー初日から１０日間の鮮明な記憶を繰り返し繰り返したどり懐かしがる日々でした。荷物の片付けをする事は、向こうでの日々の思い出が遠ざかっていく気がしてずいぶん片付けをするのにためらいがありました。それほどベラルーシは考え深く、また行きたいと思わせるような土地でした。その中にグリシコヴィッチがあり、メルクールヴィッチがあり、スタイキがあり

ました。実際に作文（「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」）でよく出てくる地名が、森があり、作文を一部だけですが感じることができたと自負しています。作文集で一人一回は見かける程の森は、向こうへ行って、人々の生活を見、確かに人と森とが共存しているという思いを抱きました。しかも森は想像以上に美しく、蚊の大群を除けば、その森にずっとうもれていたい位でした。そしてふと現実世界に戻ってみると、そういった森もやはり汚染されていて、自分がその森の不思議な美しさに魅せられただけに一層、チェルノブイリに対して、原子力発電に対して腹が立ちました。しかし、そんな私の心を和らげてくれるのは、いつもグリシコヴィッチなどで出会った友達でした。言葉は、本当にあいさつ程度しかわからないのに不思議なほど仲良くなって一緒に笑い合った友達でした。向こうへ行ってチェルノブイリをより身近に感じられるようになったのは、向こうの人々の健康が毒されるのではなく、私の友達の健康がどくされていくと考えられるようになったからです。そして、今までになかった危機感というものを抱くようになりました。よく「１０年もたった」と言われていますが、「まだ１０年しかたっていない」ということがわかったからです。「黒い出来事」の意を持つチェルノブイリのことを多くの人々にもっと深く考えてもらいたいと切望しています。ベラルーシの雄大な自然、動物、そして私の大好きな友達のためにも・・・。

東京都

藤田　妙子（雑誌編集）

参加を決めたのは７月半ばで、東京で開かれた事前の勉強会は、最終回に出席しただけ。ここ数年来、知り合いが何人もベラルーシへ出かけていたにも関わらず、「チェルノブイリ原発の事故炉は依然として放射能を放出し続けている。」「汚染地に生きるものはすべてこの１０年間汚染され続けてきた。」「今になって人びとの身体に異常が顕著になっている。」事などを、私は、出かける直前になってようやく知ったのでした。いえ、それ以前にも見たり聞いたりしていたのでしょうが、きちんと気持ちに届いていなかったのでした。

それは、チェルノブイリの事故は「重すぎ」たため、そして行動を起こすほどのきっかけもなかったため、避けて通ってきたからでした。そんな私がこのツアーに参加したのは、ロシアの大地を見たかったから。この機会を逃したら一生ロシアは行ける所ではない……と本気で思ったのです。そして、実際に見たベラルーシは、予想よりはるかに緑あふれる美しい土地でした。

主な訪問地はポレーシェ地方。ロシア正教とポルカとウオッカの土地です。

メルクールビッチとグリシコビッチの二つの村では色鮮やかな民族衣装をまとった村人からアコーディオンの演奏と歌と踊りで大歓迎をうけました。夜はウオッカが加わり、遅くまで陽気な歌と踊りが続きました。

滞在中、事故後の原発で除染作業に従事した人達から話を聞き、いくつかの病院に医薬品などを届け、市長さんや村長さんに会見。民芸品工場、サナトリウム、保育園、パン工場、汚染地区に建設中の核廃棄物工場の現場も見学しました。（病院や学校はドイツから大きな資金援助を受けていました。あとはイタリアと日本。かつての対戦国である三国が援助という不思議な構図です。ことにベラルーシはナチスドイツにより４８５の村や町が焼き払われたという歴史を持つお国柄、ベラルーシの人はこの援助をドイツ人の「償い」と考えているとか。）およそ半数の人はチェルノブイリ原発まで行きました。そして、晴れわたる夏空のもと、花が咲き乱れ、リンゴやプラムがたわわに実り、家があるのに、人影がない村……。

首都ミンスクでは国立甲状腺癌センターで外科医として放射能被爆者の治療に携わっている菅谷昭先生の話を聞きました。５０歳を越えてから日本での職を投げうち、最新医療の設備はもとよりまともに使えるピンセットにも不自由するという土地で、気負わずに新しい人生を切り開こうとしている菅谷さん。その姿勢には、ことに同行した中年男性達が心を動かされたようでした。

ホームステイしたグリシコビッチ村は人口２４００人。低汚染地に属し、際だった人口減少はないところです。村人は日本人が団体で押し寄せたことを歓待し、挨拶のたびに「ヒロシマ、ナガサキを経験した日本から来て、チェルノブイリの被害を受けた私たちに心を寄せてくださることをとても嬉しく思います。」と言ってくださいました。

汚染がひどい地域からは十数万もの人が余儀なく移住させられたと聞きますが、土地を離れるということは、それまでの生活文化が途絶えること。泊めていただいた農家には牛、豚、七面鳥、あひる、がちょう、鶏、犬、猫など動物がいっぱい。食卓の卵、ジャガイモ、ピクルス、塩豚、ジュースは自家製。おいしいキノコは森から。村人は放射能の害には不安を抱きつつも、愛する土地で自然に抱かれ、毎日の生活は明るく充足したものに見えました。

そんな暮らしを垣間みて、私はこれまで汚染地に暮らす人びとの身体の不調を聞いては「疎開するしかないんじゃない？」等と軽々しく口にしていた自分を恥じたのでした。「廃村に戻って暮らすおじいさんがポツンと言った『人間が汚した土地なんだから』と言う言葉は衝撃的でした」と話してくれたのは、チェチェルスクの町で出会った写真家の本橋成一さん。彼はこの地を舞台に映画撮影中でした。＜生きる

>って身体の健康だけではないのがよくわかります。

たぶん遠く離れた所からできることは、声援を送り、放射能にまみれた毎日が少しでもラクになるような知恵を提供することぐらいのもの。今回の旅は、ことに十代の若者同士が直接出会い、友達になる機会でした。ある高校生が最後に、「自分の友だちが辛い目に遭うのはイヤだ。だから私は何かしようと思う」と言ったのを聞き、実際に人が行き来することの意味がわかった気がしました。

広島から見たチェルノブイリ支援

８月１０日（土）広島国際会議場にて、「広島から見たチェルノブイリ支援」～５年間の軌跡と事故後１０年目の現状と将来～と題する報告会が開かれた。

主催したのはチェルノブイリ支援・広島医療協議会。

ロシア語医療通訳として何十回となくウクライナやベラルーシ、ロシアを訪問している山田英雄さんがビデオに収めた「５年間の軌跡」の報告を行なった後、専門家による医学的調査・研究報告が行われた。

現地で多発している小児甲状腺癌とその対策については武市宣雄先生（広島甲状腺クリニック）、原田穣一先生（川崎医療短期大学）の両氏が、汚染地での放射線量測定調査報告については星正治先生（広島大学原医研）が、また白血病発症の事例と今後の支援のあり方について今村展隆先生（広島大学原医研）がそれぞれ報告を行なった。

甲状腺ガンの早期診断システムの確立が急がれる！

広島甲状腺医療班の活動は１９９１年８月の第一回現地訪問から始まり、翌年には甲状腺に問題がある小児を広島に招待し検診を行なっている。以来、現地専門家の招待と研修、医薬品、医療器具等の持参、現地での数回にわたる講演活動など、現地の病院等との信頼関係を作ってきている。特に病院検診や学校検診を通して得られた結果を翌日には受診者に返すという「翌日返事システム」は、吸引穿刺による細胞診の早期診断等も合わせて、単に検診を受けたというだけでなく、その結果を直接本人が聞くことが出来るという意味でも、信頼関係を築く上で素晴らしいシステムと言える。

武市先生の話を少し紹介しよう。

『ベラルーシの甲状腺研究は米国に買われてしまいました。研究所ごと買

い取られ、スタッフの賃金を含め全て米国が資金を出しています。広島に原爆を落とした後、情報を全て米国が独占したのと同じやり方を感じます。』『甲状腺ガンということではベラルーシではゴメリ、ウクライナではプリピャチに悲劇が集中しています。』と、甲状腺細胞組織のスライドを見ながら、『ガン化する細胞にはこのように繊維化が見られます。繊維化とはホルモンを作っている細胞が崩壊することであり、繊維化してしまえば元にはもどれません』『通常の甲状腺ガンであれば早く治療すれば治る確率が高い。』そのためにも学校検診を含めた汚染地域での甲状腺検診の重要性。特に検診車の導入を含めた甲状腺ガンの早期診断システムの確立が急がれるとの武市先生の報告であった。

本当に必要な援助を、必要なところに！

白血病の発症については広島大学原医研の今村先生が、原爆被爆者との比較を行ないながらリクビダートル（放射能除染作業従事者）に見られる症例についての報告を行なった。

チェルノブイリ事故による白血病の有為な上昇傾向は今のところ見られないが、リクビダートルの間に骨髄異形成症候群＝前白血病状態が見られるという。また、Ｐ５３というガン抑制遺伝子に異常がある人の４人に３人が死亡しており、重要なガン抑制遺伝子に影響を受けているかどうかが問題になる。大量の被曝であっても、ガン抑制遺伝子に影響を受けなければ大丈夫だし、逆に、少量の被曝であっても、影響を受けていればガンになるという。

今後、チェルノブイリの被害は除染作業にあたったリクビダートル、特に消火作業や放射能の除去作業に直接従事し、６０ラド前後の被曝をしてしまった約２０万人にのぼるリクビダートルに白血病が多発する心配がある、という。すでに脳神経を侵され始めており、前白血病症候群も多発している。『この人たちに対する援助を集中することが急務である。本当に必要な援助を、必要としているところに』。今村先生の提案である。

今回の広島での報告会は、専門家の立場で支援を続けてきた人たちが、専門家の立場で事故から１０年経った現状と今後の支援のあり方を広く市民にアピールしようということで開かれた。こうした取り組みは広島ではもちろん初めての試みであり、全国的に見ても稀ではなかろうか。招待をいただいたので、私と中村さんと山口さんが参加してきた。

ちょうど私たち支援運動・九州もこれからの１０年に向けた支援の方向性を検討していた時期でもあり、大変参考になる話を聞かせていただきました。今後の支援に役立たせていただきます。

（深江）

ブイソフ親子の来日について

昨年来日したビクトル・ブイソフ君とお父さんのワレーリ・ブイソフさんが来日します。チェルノブイリ後の人々の生活について実際その地に住んで取材しているジャーナリストの目を通して語っていただきます。また、ワレーリ・ブイソフさんの写した写真も展示します。

どうぞ皆さん、お出かけください。

紹　介

＊ワレーリ・ブイソフさん

記者、写真家。チェルノブイリ後の人々の生活の写真を撮り続けている。「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」にもその写真は使われている。

＊ビクトル・ブイソフくん

１４歳。「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」の中の作文『苔、ああ苔』を書いている。来日は昨年に引き続き２度目。前回は、ギター持参で来日し、弾き語りを披露してくれ大好評でした。また、核問題についてもしっかりとした考えを持っており、平和の大使としての大役を充分はたしてくれました。

＜日　程＞

１１月　９日（土）　来日

１１月１０日（日）　北九州

＊チェルノブイリ支援に関わっている若者との交流

１１月１１日（月）　長崎観光

１１月１２日（火）　長崎→中津市

＊夜、中津にて交流会（問い合わせ TEL 0979-22-0963 須賀さん）

１１月１３日（水）　中津市

＊中津市立小楠小学校にて交流

１１月１４日（木）　下関市

《ブイソフ親子の講演とスタディツアー報告会》

会場　細江カトリック教会ホール

とき　午後６時（予定）

主催　チェルノブイリ支援運動・下関

＊スタディツアー報告は、西野　自由理さん

＊くわしくは、TEL 0832-23-9061 沢村さんまで

１１月１５日（金）　水巻町

＊午前中は、折尾公民館で交流

《チェルノブイリからの報告と支援コンサート》

会　場　いきいきほーる　または水巻町中央公民館

と　き　午後６時（予定）
主　催　いきいきほーる運営委会
参加費　１０００円（予定）
内　容・ブイソフ親子の講演
・辻幹夫さんのギターコンサート
・スタディツアー報告（矢野　宏和さん）

１１月１６日（土）　福間町
《チェルノブイリからの報告と支援コンサート》
会　場　アクシス玄海
と　き　午後６時（予定）
主　催　グリーンコープ生協県北支部
参加費　１０００円（予定）
内　容・辻幹夫さんのギターコンサート
・ブイソフ親子の講演
・スタディツアー報告（寺嶋　悠さん）

１１月１７日（日）　田川市
《チェルノブイリからの報告と支援コンサート》
会　場　田川労働福祉文化会館
と　き　午後２時または３時から
参加費　１０００円（予定）
内　容・辻幹夫さんのギターコンサート
・ブイソフ親子の講演

◎１１／１５，１６，１７についての問い合わせは、有機コーヒー（TEL０９３－２０２－００６８まで）

お知らせ

～チェルノブイリ原発事故１０年子どもたち支援～
みんなで考えよう！！　原発の現在　そして将来
久米先生＆市民の対話集会
&
若者が見たチェルノブイリ’９６夏スタディツアー報告

と　き：１０月１３日（日）午後１３：３０～
ところ：福岡私立中央市民センター　視聴覚室（地下鉄赤坂駅下車徒歩５分）
会　費：５００円
主　催：学習サークル「てんとうむし」
問い合わせ　西本　健（TEL０９２－８６３－１９３９）

＊スタディツアーの報告は、佐藤　進一さんと寺嶋悠さんが行います。
（主催者の西本さんもスタディツアーに参加しました。）
＊チェルノブイリの子どもたちが描いた絵と写真の展示もあります。

北九州近郊にお住まいの方は、ぜひお出かけください！！

北九州国際交流ウィーク

北九州市八幡東区平野１丁目の国際村交流センター（八幡東中央公民館や響ホールと同じ建物内）で１週間にわたって市民レベルでの国際交流の催しがあります。チェルノブイリ支援運動・九州も今年も参加します。

帰国報告 「若者たちが見たチェルノブイリ」

日　時　１０月５日（土）
　　午後３時～５時
場　所　八幡東中央公民館講堂
　＊スタディツアーに参加した若者たちが報告をします。

ベラルーシの子どもたちの原画展と写真展

日　時　９月２９日～１０月６日
場　所　国際交流村
＊絵画教室の子どもたちが、チェルノブイリ事故や日常について描いた絵を３０枚程度展示。写真パネルも展示。

エスニックバザール

日　時　１０月６日（日）
　　午前１０時～午後３時

＊国際交流センターの中庭で、国際交流団体による料理出店や民芸品の販売があります。本場の各国料理が気軽に楽しめ、毎年大好評です。チェルノブイリ支援運動も、ベラルーシ料理と民芸品の屋台を出します。

《料　理》　ソリャンカ（ロシア風塩味スープ）、ドルーニキ（じゃがいものパンケーキ）、シャスリック（串焼き）、ハニーウォッカ、コーヒー、ロシアンティ、ロシアンクッキー

＊この通信または支援運動・九州の封筒を持ってきた方は、飲み物とクッキーのセット、またはハニーウォッカが無料になります。ついでにお手伝いをしていただけたら大変ありがたい！！

九州ＤＥＶＡＮＤＡ
’９６生命のまつりｉｎふくおか
にも来てください！！
＊１０月２７日（日）に、かしいかえん西駐車場にてグリーンコープ生協が中心で行われます。この時もチェルノブイリ支援運動・九州はベラルーシ料理を出します。（お手伝いができる人は、連絡してください）

第７回、チェルノブイリ支援運動・九州総会

総会の日程が決まりました。

と　き：１２月８日（日）
　　午後２時３０分～
ところ：国際村交流センター

※　総会に先立ち、午後１時より第７回総会記念講演会を開催します。講師は広島甲状腺クリニック院長の武市先生にお願いしています。詳しくは次号にて。

総会議案については次号で提案しますが、これまで事務局で議論、検討してきた問題について、整理して報告します。総会議案のたたき台ということでお読みください。

チェルノブイリ支援・これからの１０年に向けどのような支援をするか

一、現状認識

①　ソ連邦の崩壊に伴う不安定な経済状況と物価の高騰、経済を立て直そうにもチェルノブイリが大きな重しの一つになっている。

②　ベラルーシ政府、ウクライナ政府が独力でチェルノブイリの被害を克服することは困難であり、これからも国内での民間グループの活動、及び国際的援助が大きな力となる。

③　しかしながら客観的には「チェルノブイリ１０年」を境に全てが収束したと思わせる方向に向かうものと思われる。それはつまり国際的支援の減少を招き、日本でも運動、支援の縮小という形で現れてくると思われる。

④　こうした時期に、これからの１０年を見すえた運動の提案が、しかも的確な提案が出来るかどうかが、問われている。

⑤　九州の運動はベラルーシ現地のＮＧＯを媒介とした運動であり、今後も現地の市民と手を携えて運動を続けていきたい。ところがベラルーシではボランティア組織の維持さえ困難なのが現実であり、同盟の機関誌、週間新聞「ナバト」もかつて月間となり、ついに今年５月には廃刊となった。

⑥　運動を始めた当初より、日本側が一方的に支援を続けていく関係ではなく、ベラルーシ側の自立を助ける支援のあり方を模索してきた。６年間の支援運動から得た１つの結論として、現地でチェルノブイリの支援活動をしている人たちが、その活動を通して生活できるような状況を作れないものか。そんな手助けを私たちができるかどうかも今後の大きな

課題としてある。以上の点を考慮して、今後の支援のあり方を考えてみたい。

二、借り物でない、自前のサナトリウムをベラルーシに！

汚染地に住んでいる子どもたちが移住したくてもできないという現実がある中、子どもたちのための転地療養施設を確保し、運営していくという私たちのサナトリウム運動は意義ある運動と言える。子どもたちとの出会い、自分たちの支援の中身が具体的に目に見えるという意味でも分かりやすい運動である。

しかし、当初からいくつかの問題点も指摘されていた。（・支え続けていくことの困難性、・ベラルーシ側の自立を助ける支援が必要、サナトリウムの施設が借り物であるなど）

そこでこれからの１０年という時間の中でみていくと、運動の継続性という面からも借り物ではない、自前のサナトリウムが必要ではないかと考えられる。この自前のサナトリウムとは、単に「療養施設」というだけの施設ではなく、その場所が、生産の拠点となり、生活の拠点となるような施設としてイメージしたい。

自前のサナトリウムについては新しく建設するか、もしくは既存の施設を購入するという選択肢があるが、いずれにしても相当額の資金が必要であることは間違いない。この資金を九州だけで調達することはなかば不可能に近い。そこで、他のグループ・ネットワークとの共同事業ということで実現させたい。

三、ミンスクに医薬品工場を建設しよう！

ベラルーシ側が自立でき、自分たちで被害を克服していけるような環境をどう作っていくのか、あるいはその手助けをすることが出来るのかが、いま問われているといっても過言ではない。従って今この時期にベラルーシ国内での自立した運動（経済的にはベラルーシ国内でのルーブル循環の経済活動による自立）が必要になってくる。それはまさに様々な意味での。

旧ソ連時代、医薬品はロシア、ウクライナで生産され、各共和国に供給されていた。従ってベラルーシには製薬工場がなく、ロシアから輸入するしかないという状況である。医薬品に限らず石油もロシアからの輸入に頼っているのだが、外貨での決済を迫られ、厳しい配給制になっている。モズィリ市にはソ連時代最大規模（とモズィリの人は言っていた）の石油コンビナート工場があったが、今でもあるのだが、石油がないためベラルーシが独立すると同時に閉鎖に追い込まれている。当然働き場がなくなりモズィリ市の失業率は５０％を越えていた。（９２年当時、この状況が改善されたという話は聞いていない。）

政府自身に医薬品等を供給する力が無くなってきており、病院にはガーゼすら不足するといった状況になっている。以前は薬もタダで支給されていたが、今ではお金を持っている人間しか薬を手に入れることは難しくなっている。

日本にある様々な救援グループの主な活動は、日本から医薬品などを持ち込むという運動であるが、日本から医療機器や医薬品などを持ち込む運動は、それにかかる経費の何割かは無駄になっていることがこれまでの経験から分かっている。具体的には日本の医薬品は割高であり（信じられないが現実である。同じ薬が国によってかなり価格の差がある）、モスクワやドイツなどから仕入れるほうがはるかに安く仕入れることが出来、かつ運搬にかかる経費も安くつくという現実がある。

また今回のツアーでも、持ち込んだ医薬品について「ロシア政府発行の輸入許可証がないと税関を通すことができない」と、あわや没収されそうになったそうです。ロシア政府の対応は、毎年のように変わるのですが、年々厳しくなっていることは間違いない。

そこで、ミンスクに医薬品の工場を作ることができれば様々な問題が解決できると思う。日本からの医療援助をこのために集中すれば、これまでの援助よりもはるかに効率のよい支援が出来るのではないか。同時にこうした支援は、ベラルーシ国内での雇用の確保、経済の循環を生むことにもなる。

この２点を中心にベラルーシ側の情報を収集したり、検討を重ねてきました。また、広島からの提案（山田・武市プランや今村プランの）も検討しています。各方面の方々の意見を聞いたり、ツアー参加者からの報告を聞くと、前途は多難のようです。

製薬工場についてもぜひとも実現させたい課題ですが、薬にはそれぞれ特許が付いており、ずっと高い特許料を払い続けなくてはならないし、独自に開発していこうとすれば、その開発費、研究費は人材の育成から含めて莫大なものとなり、国家を建設していく過程で、そうした作業は最後の仕事に位置づけられているといいます。プラン自体の必要性は認めるが、その前にしなくていけない仕事はたくさんあるのではないか。薬もドイツ辺りから輸入するほうが現実的である、という指摘を大勢の方からいただいています。

現実的には、今後日本から医薬品を持ち込むというやり方は止め、ベラルーシで調達できるようなシステムを、同盟を含めたベラルーシ側と検討するということで整理することになると思います。

また、ベラルーシの特産物を輸入し、日本で販売する計画も検討しております。今回のツアーがベラルーシの民芸品を仕入れてきました（７万円相当）。どの程度の収益が上がるか分かりませんが、ある程度採算があうようなら、支援運動の事業として考えてみてもい

いかも知れません

皆様のご意見をお寄せください。事務局からの提案は、総会議案として次号の通信で行ないます。

（深江）

事務局より

郵便振替用紙について

振替用紙は毎号入れています。事務作業の手間を省くためと、いつでも思い立った時に募金できるためです。すでに募金をされた方には不要となりますが、どうぞご了承ください。なお、入金したかどうかわからなくなった場合は、どうぞお気軽に事務局までお問い合わせください。事務局は、月～金曜の午前１０時～午後５時まで開いています。それ以外の時間にもいる場合があります。また、留守電にメッセージを入れますと事務局員に転送されますので、折り返しお電話いたします。その場合は電話番号も入れてください。

領収証について

領収証につきましては、振り込んだ時に郵便局から発行される”払い込み兼領収証”に代えさせていただいています。１万円以上送金の場合は、支援運動・九州から領収証を送らせていただいています。１万円未満の送金の方でも支援運動・九州からの領収証が必要な方は、振込の際、その旨をお書きください。また、領収証は、通信を送付するときに同封しますが、早く欲しい場合もその旨をお書きくだされば、その都度送ります。

尚、郵便局に払い込んでからこちらに届くまでは１週間かかります。本の注文などでお急ぎの場合は、電話であらかじめご連絡ください。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

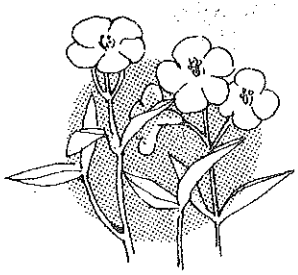
ペラルーシの子どもたちの絵と写真パネルの貸し出しについて

おかげさまで大好評です。最近は、特に小・中学校での展示が増えています。ちょうど絵を描いた子どもたちの年齢にあたるので、見ている子どもたちの反応は大きいです。

貸し出しのスケジュールも詰まっていますが、まだ空いている日もあります。展示を考えていらっしゃる方は、お気軽に連絡ください。

貸し出しの費用は無料ですが、送料は負担していただきます。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇



豊かな森でうまいキノコ料理だが…

'96. 9.20

ベラルーシの旅 ▽1△

旧ソ連のチェルノブイリ原子力発電所で大規模な事故が起きてから十年。この夏、福岡県や首都圏などの高校・大学生、会社員ら二十人が、放射能で汚染されたベラルーシ共和国を十日間の日程で旅した。企画したのは八幡東区に事務局を置く市民団体「チェルノブイリ支援運動・九州」。現地では廃村や療養施設などを訪ね、住民と食事をともにしながら、その生きざまに触れた。記者も夏休みを利用してこの旅に同行、放射能汚染の地に足を踏み入れた。垣間見た現地の様子を報告する。

（稲野慎記者）

「これは息子が庭で取ったキノコよ」

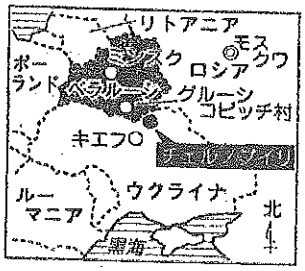
白い皿を持って近寄って来た村の女性は、満面に笑みを浮かべていた。こちらが戸惑うほど表情が明るい。皿には細かく切られたキノコがいっぱいに盛られ、バターの香りが鼻をくすぐる。

チェルノブイリ原発から西に約百六十キロ、ベラルーシ共和国にある人口約三千五百人のグルーシコビッチ村。カシやマツなどが生い茂る豊かな森の広場で、村人たちと昼食を取った。

□　□

心地良い陽光が降り注ぐ中、用意されたのは野菜、パン、卵料理、それにウオツカ。だが、差し出されたキノコには、正直言って気が重い。

旅に参加している福祉施設職員大友慶次さん（五六）＝東京都立川市＝によると、この村でとれたキノコからは今春、放射性物質のセシウム137と134が一キロ当たり計四、四八六ベクレルも検出されたという。日本の輸入食品の放射能制限値三七〇ベクレルをはるかに超える値だ。



笑顔でキノコ料理を持って来てくれた女性にはつくり笑いで応じたものの「放射能たっぷり」と思うと心は揺れる。が、断れない。思いきって食べてみた。バターが口いっぱいに広がる。確かにうまいが…。

□　□

辺りからアコーディオンの音が聞こえてきた。演奏に合わせて歌声も響く。曲は「モスクワ郊外の夕べ」。ウオツカを飲んだ村人たちは手をつなぎ、軽やかなステップで民族舞踊のポルカに興じている。休日にはよく見られる光景、という。

それにしても、この笑顔、笑顔…。「放射能汚染」とは裏腹の、この明るさ。少し離れたところで踊りを見ていた村人に尋ねてみた。「こんな場所に住んで大丈夫？」

けげんそうな表情で返事があった。「キノコはたまにしか食べない。それに、みんなこの森で子どものころから遊んできた。移住しようにもお金もないしね」

「苦痛」は見せないようにしているだけなのだろうか。楽しげな踊りを見ながら、私の胸には鉛が入ったようだった。

※西日本新聞の稲野慎記者（２９歳）は、ご自分の夏休みを使ってスタディツアーに参加されました。その模様が７回にわたって朝刊に連載しています。

忘○がたきふるさと 少女○歌に涙

ベラルーシの子

▽4△

ウオツカをしこたま飲んだ。すっかり酔っ払ったが、しかし、それは酒のせいばかりではなかったかもしれない。

ベラルーシ共和国のグルーシコビッチ村を離れる前夜。集会場で村人たちが送別会を開いてくれた。集まってきたのは、赤い縦じま模様の民族衣装を着たお年寄りなど約五十人。

日本からの旅のメンバー二十人とともに囲んだテーブルには、肉や野菜料理が並んだ。男たちは早速ウオツカに手をかける。私も端の方の席について宴に加わった。

そのうち民族衣装の女性数人が伝統のポルカを踊り出した。テーブルのあちこちから覚えたてのロシア語が聞こえ、グラスを飲みほした後の拍手が響きわたる。

和やかなムードの中、私も二杯目のウオツカをグラスに入れようとしたとき、十五歳の少女、リューダがおもむろに立ち上がった。

放射能に汚染されたベラルーシの子供たちの作文集「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」子どもたちのチェルノブイリ(梓書院)の中で「私は生きる」という作文を書いた少女だ。

□　□

〈そのジモビッシチェ(注・森の中の場所の名前)には、スズランが咲き、クルミの木があり、沼地にはツルコケモモが生えています。そこは、まさにコケモモの宝庫なのです〉

〈私たちの生地よ、許してください。ふるさとの大地を愛しています。…私は自然を救うため、大地のため、人のため、できることは何でもします。どんなチェルノブイリも私を邪魔することはできません。私は生きます。私の血筋は続いていくでしょう〉

旅に参加した日本の若者たちの心をとらえた作文のひとつだった。ここグルーシコビッチ村は、リューダの生まれ故郷である。

その彼女は立ち上がると、日本語でゆっくり歌い始めた。テーブルのざわめきが消え、きれいなソプラノが流れる。

「ウサギ追いしかの山 小ブナ釣りしかの川 夢は今もめぐりて忘れがたきふるさと」

私はこらえていたものが一挙に噴き出した。眼鏡をとってぬぐっていると、横にいた村長さんがウオツカをグラスについでくれた。

故郷を愛する力。そのやさしさとたくましさ。君たちには見えない死の恐怖がつきまとっているというのに…。

たまらず何杯もグラスをあおった。歌声の余韻と酔いに身をまかせているうち、民族衣装の婦人が私の手をとった。フラフラのまま初めてポルカを踊った。

グルーシコビッチ村を去る朝、日本からの若者と別れを惜しむリューダ

じわりと涙　この出会い　いつまでも

ベラルーシの旅

▽6△

朽ち果てた家が点在する。人けはない。ただ、陽光を浴びた畑には、ミカンに似たオレンジ色の果実が実っていた。

十年前、大規模な事故を起こしたチェルノブイリ原発から北に約百七十キロのドブロフカ村。高濃度の放射能汚染により住民が村を追われた廃村の一つである。同様の村はベラルーシ共和国で四百に上るといわれる。

ここに大学生の寺嶋悠さん(一八)＝宗像郡津屋崎町＝や高校生の西野自由理さん(一八)＝下関市＝らが足を踏み入れた。

廃屋の中は、ほこりをかぶった服がハンガーにかかったまま。床が抜け落ちたところもある。

ある廃屋で、一枚のはがきが床に落ちているのを西野さんが見つけた。息子から母と妹あてに「健康と平和を祈って」出された便りだった。

いつもは明るい西野さんが押し黙る。「この人たちは今ごろどうしているのだろう」。豊かに実をつけた果物畑の空虚な明るさが、じわりと涙を誘った。

移動用のワゴン車に乗った後、寺嶋さんも口数が少ない。一面に広がる麦畑をじっと見ている。

高濃度汚染地帯からやや離れたチェチェルスクのパン工場を訪ねた。入り口にはピンクのバラの花が数本。そのかれんさが心を打つ。

この地の人口は十年前の五分の一。パン製造機の稼動もめっきり減ったという。パンやクッキーで歓待してくれた女性工場長は、寺嶋さんからお土産の博多人形を贈られると、彼女を抱き締めてほほにキスをした。

帰り際、寺嶋さんの目に涙が浮かぶ。「ベラルーシはあまりにも遠い。この人たちともう会うこともないのか」

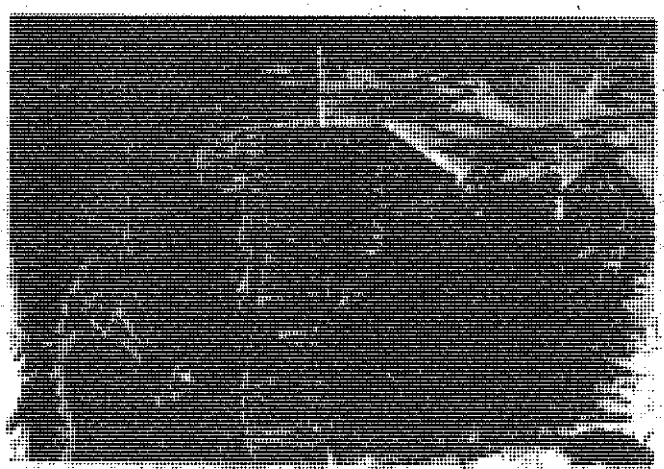
□　□

同じ日、別行動で、大学生の佐藤進一さん(一八)＝春日市＝らは事故を起こしたチェルノブイリ原発四号炉の前にいた。

ほかのメンバーと原子炉を背景に写真に納まろうとして、顔がこわばった。ポルカを踊る村人、花を手にした素朴な笑顔が、なぜか次々に目に浮かぶ。「どうしてこんなに豊かな人々が」。カメラの前で自分はどんな顔をすればいいのか…。

ふだんはあっけらかんとしている若者たちは、行く先々で言葉を失い、涙を見せた。大学生安田麗さん(一八)＝小倉南区＝は言う。

「私たちの出会いをつなぐのがチェルノブイリだと思うと複雑な気持ちになる。でも、一つひとつの出会いはいつまでも大切にしたい。ただ、それだけです」



ベラルーシの放射能汚染地の子供たちが描いた絵。日本からの若者たちはどういう風景を心に刻んだろうか…